

J2017 社会科学院 1 陣 団員感想文

◆ 今回の日本訪問では、文化庁の職員や奈良文化財研究所の学者のレクチャーを拝聴し、数多くの文化遺産保護関連施設（博物館など）を視察した。こうした学習を通して、次のような感想を持った。

- (1) 日本では政府から国民まで、皆が文化遺産の保護を重視している。政府は関連の法律を制定し、異なるレベルの文化遺産に対して種別に指導を行っており、一定レベルの文化遺産の保護には資金援助を行っている。様々な文化機関が、一般市民に対して、文化遺産の保護の強化を呼びかけている。政府と文化機関が金銭面、人材面、物質面で行っている支援はとても大きい。実際、保護を実施していく段階においても、一般市民も確かな保護意識を持った行動をとっている。
- (2) 伝統文化財の中でも代表的な建築物の修復を行う際には、政府や関連機関が多額の費用を投入し、専門的な修復作業を行っている。しかも、若い後継者の育成にも気を配り、小中学生の興味を引きつけて、文化財の保護活動に参加するよう工夫している。このように危機意識を持って先手を打っておくやり方は、私たちも学ぶべきだ。
- (3) 文化財の区分について、例えば一部の稀少動物をその範疇に組み込むなど、日本は独自の視点や考えを持っている。中国も実状に即した形で、独自の制度を作ることができると思う。

◆ 今回の日本訪問では、専門家のレクチャーから、文化財保護現場の現地体験に至るまで、たくさんの収穫があった。たった1週間という短い期間だったが、日本の科学技術、印刷、歴史、戯曲、伝統建築の基本を理解することができた。受け入れ関係者の心のこもった手配に非常に感謝している。

パナソニックセンターでは、パナソニックが日本の有名企業として、社会的責任を果たしていることを強く打ち出していると感じた。科学技術が人々の生活をより良いものにすることを訴えている。東京国立博物館では、丁寧に陳列され、詳細で分かりやすい解説がついた数多くの展示品を鑑賞した。山本能楽堂では、優美な能楽の舞台を鑑賞し、その発展の歴史について学んだ。奈良では、一千年前の伝統建築や広大な原始林、公園を自由に歩き回る野生の鹿を見て、人と動物がうまく共存していると感じた。

中国と日本は一衣帯水の隣国であり、自然や文明、文化において似ているところがたくさんある。中国は日本の進んだ経験、特に科学技術、文化、教育の分野で成功した経験から学ぶべきだ。

今回の訪問で最も印象的だったのは、日本人の仕事に全力で打ち込む姿勢だ。ホテ

ルのドアマン、博物館のインフォメーションの係員、旅行会社のガイド、レストランの従業員まで、皆がとても熱心に自分の仕事に打ち込んでいた。以前から日本人には「匠の精神」があるという話をよく耳にした。そして今、自分の目で、いわゆる「匠の精神」を見ることができた。私が考えるに、これこそ日本人一人一人が持つある種の気質であり、他国から尊敬される仕事ぶりの源なのだと思う。

◆ 1. 東京国立博物館の参観：

東京国立博物館は歴史的価値のある建築物を本館として利用し、歴史文化財を陳列している。近代建築を保存するとともに、その建築物に文化財を陳列することで、相乗効果を生んでいる。同博物館敷地内の法隆寺宝物館は、外観は斬新だが、芸術的な息吹を濃厚に感じさせる所で、館内の文化財の陳列方法や雰囲気作りが素晴らしい。展示において、まず文化財を第一に据えるやり方を徹底しているのは正しい方法だ。それに比べ、中国の一部の博物館では、特別展に力を入れすぎて、余計な装飾が多く、主役をないがしろにしているような傾向がある。

2. 奈良の視察：

奈良は古跡の保護と展示という面で優れた成果をあげている。同県の歴史的建築物の保護方法について、奈良県教育委員会文化財保存事務所の職員のブリーフを受け、実際に薬師寺などの解体修理の様子をこの目で見た。再び組み上げるための正確な資料として、解体のプロセスを詳細に記録していた。また、唐招提寺金堂の大修理は完了まで10年を費やしたという。作業の過程では金堂の歴史の考察に重きを置いていた。修理事業の機会を利用し遺跡全体の状況をあらゆる方向から把握する方法は正しいと思う。しかし、歴史的建築物全体の解体修理というのは本来の目的から外れていないのかどうか、よく考える必要がある。修理後の状態と現状が異なる部分について、展示の中の解説をどのようにすり合わせるかが、一つのポイントである。

◆ 日本の伝統文化と中国の文化が密接に関係していることは早くから知っていた。しかし、実際に何カ所も日本の寺院を訪問し、その建築の仕組み、金堂の構造、仏像の形式、宗派の源を学び、中国仏教との相違点を知った後、中日両国間の長い歴史的関係をより明確に感じることができた。

中でも最も印象深かったのは、文化庁ブリーフで述べていた、日本の寺社では苔の保存に手を尽くしており、欧米の旅行者には中々理解されないという点だ。中国人としては、とても親近感を覚えた。中国の古詩の中に、苔の成長が時の移ろいを意味するという次のような一節がある。「門前遅行の跡――緑苔を生ず」（わが家の門前には、あなたが出発しかねていた時の足跡が残っており、その一つ一つを青い苔が覆っ

ている)。この一節には、遠くへ旅立った人への思いも託されている。「相思えば黄葉落ち 白露青苔を湿す」(想いを募らせれば葉が落ち、白露が苔を湿らせていく)。日本の寺院において苔に託された意味は、きっと、もっと穏やかなものだろう。或いは、周敦頤が言うところの、「観天地生物気象」(この世の万物の成長を観察する)という意味が込められているのかもしれない。いかにせよ、日本と中国の文化では人と自然が渾然一体となっており、とても似通ったところがある。

外部のもの、自然景観すら許容し、豊かに表現できる人が歴史を作るとき、今回の訪問のテーマである「文化遺産」ができあがる。この視点から言うと、文化遺産の保護というのは、政府や特定の組織の仕事ではなく、社会全体が共に取り組む事柄であり、参観者一人一人が取り組むことでもあるのだ。長い歴史を持つ唐招提寺の木造建築の金堂が今日まで良好に保存されてきたのは、どの時代でも大切に扱われてきたことと大きな関係がある。

こうした愛惜の心は、今回の訪問の中でも感じる事ができた。例えば、参観者が各施設の禁止事項や決まりをきちんと守っていること。絶対に大声を出して騒がしくしないし、ゴミのポイ捨てもしない。また、歴史的建築物の修理作業はとても計画的で、細やかであり、絶対に工期を削るようなことはしない。奈良県民は唐招提寺の50億円という修理費用に対して理解があり、積極的に支持している。また、関連の交流事業に対してボランティアの皆さんが熱意を持って取り組んでいる。今回の日本訪問を通して、文化遺産保護の技術的分野で、中日両国が既に多様な交流と協力を行ってきたことを知った。一般市民の参加と協力をいかに呼びかけていくかという部分に、さらに突っ込んだ交流ができる余白があると思う。

- ◆ 日中友好会館の皆さんの心の込もった手配に感動した。スタッフが全行程随行してくれた。豊富で有意義なプログラムによって、私たちは短期間で日本の科学技術の急速な発展から、重みある歴史・文化的背景まで学ぶことができた。同時に、最先端技術が文化遺産の保護に応用されている様子も見ることができた。

中国と日本は共に数多くの世界文化遺産を有しており、ある分野で相通ずるものを持っている。有形文化遺産をいかに保護していくか、無形文化遺産をいかに伝承していくのかについて、共に学びあい、互いの良い部分を取り入れながら事業を進めていくべきだ。

印象深かったこと：

日本には綿密な災害の緊急対応マニュアルがある。パブリックスペースでの呼びかけから、一般市民や旅行者への教育、住宅の緊急避難経路を示す共通のマークに至るまで、心を込めている。